

入力練習 7

アニメ映画監督の宮崎駿さんが引退するという寂しいニュースに、司馬遼太郎さんの言葉が重なった。1988年に長編小説「韃靼疾風録（だったんしっぽうろく）」で大佛次郎賞を受けたとき、司馬さんは創作の厳しさをこう語っている。「小説を書くというのは、空気の中から何かを取り出して手の上で固形にする仕事。私は精神力、体力とももうそんなに残っていない」。まだ65歳だったが、言葉の通りにこれが最後の長編小説になった。一作に吸い取られる知力体力はいかばかりかと想像したものだ。夢と叙情にあふれる宮崎さんの長編アニメも、つくる側には七転八倒の仕事だろう。まだ72歳。惜しむ声が多いが、ご本人は、自分の創造的な期間は終わったと言っているそうだ。それを聞いて、もう一人思い出す人がいる。野球の長嶋茂雄さんは引退の際、こんなふうに語ったそうだ。「バットを折りながらも人のいないところへ落ちていた打球が、野手の正面に飛ぶようになったと感じた。力が落ちたということだ」と。どの道にも、極めた当人しかわからないことがあるのだと思う。ともあれ勝手な書きぶりはこの辺にして、あとは6日予定という会見を待ちたい。アニメという「日本のお家芸」を至芸に高めた人は、どんな感慨を聞かせてくれるのだろう。かつての対談で、司馬さんは宮崎さんを「ご自分の中の子どもを、実に大切になさっていますね」とほめていた。大人の中の子どもを掘り起こすのが宮崎作品だった。もう少し見たい気がする。

以上 618文字